

「地域から学会を形成する」—農業体験・シンポジウムを通して—

「やっぱり顔の見える関係が重要だよな」

まだ私が大学院にいて勉強していた時代に、何度となく聞いた言葉でした。顔が見えるような関係で生産と消費を繋ぐ、農村と都市の交流で顔が見える関係を築いて「安心・安全」を理解してもらい、大体そんな感じでしょうか。

私は実は少しそのいいように違和感を感じていて、一度都市出身の大学院生に「じゃあ農業の顔ってどんな表情をしているの?」と聞いた事があります。その子の口から出てきたのは「のんびりしている」「都市より豊かで」「晴耕雨読」のイメージそのものでした。確かに間違っていない面もありますが・・・岡山市南部の専業農家の多い地域に生まれた僕には、友人の農家の子弟などの様子や家族たちが守る農地の様子を見て「農業って経営的にも労働的にも過酷なんじゃな」と感じ、廃業などの現実を見てきた感性からいって、どうも大学院の「将来の農業の専門家」たちが持っている農業観に「こんなんでいいんだろうか」という感を持っていました。

「顔が見える」って言い方は往々に町の側からいわれることで、相手が見たいと思う顔を張り付けてるだけになっちゃうのかな、それならそれを打ち破る表情のある顔を知りに来てもらおう。そう思って大学院生時代の2004年から後輩たちに地元盟友の所に農業体験に来てもらうようになりました。

何年か続けていくうちにそれがだんだん大きくなって、せつかくなれば地元の盟友と一緒にイベント化しようという事になり、2008年から今回報告させて頂くことになった農業体験と、現場から発信する農学「本気で農業を語るシンポジウム」を開くこととなりました。

スライドにあるように、現場を知るなら、農業労働を通して、その学びを農業者自身から発信しよう、盟友と共に！学生に農業現場の感覚を持って帰ってもらう目的の下に、特に農学部を学生を中心とした大学生、大学院生の農業体験を行い、最終日には農業者の視点から開催するシンポジウムで専門家や学生たちに農業者の視点で意見を言う場を作っていくこととなります。

良くある「収穫だけしてもらってレジャーの一環のように農業の楽しいイメージだけ持って帰ってもらう」的な農業体験とは一線を画す意味で「用意された物」ではなく、一日だけでも全力で「農業経営者になってくる」というスタンスで普段の作業に従事してもらい、もちろん一日中片づけもあります、うちの農場では一日土入れと鉄骨切りって日もありました、そういう「ガチ」学びを学生たちに課すことになったんです。

農業を好きになることももちろん重要ですが、「こんなにきついんだ」「好きになれないかもしれない」という感覚こそ「じゃあそれをどうにかするためにどうするのか」という感性を農業の専門家予備軍に芽生えさせることが出来るのではないかと、そういうコンセプトの元、瀬戸内市の盟友2人と共にプロジェクトを進めていくこととなったのです。

これはスライドにあるように、行政などの介入しない盟友たちとの自主的な取り組みであるという事も一つの象徴ですし、農業者から発信する農学と言うのは今の大学がなかなか持てないものを、なら盟友と一緒に作ってやれる的に始めていったそう言う事になるでしょうか。正直ノリ的であったところもあるんですが・・・この思いに私たち自身がのめり込み、盟友たち、農業者の方、学生たちに思った以上に受け入れられたことでこの取り組みは急速に大きなものとなっていくのです。

(瀬戸内市と岡山県南、農業を知る適地)

この取り組みが始まり、また就農した私の農場のある瀬戸内市は2004年に、邑久町、長船町、牛窓町の合併により誕生しました。瀬戸内海に面した温暖な気候の下、土地利用型、施設栽培、果樹、酪農などの様々な作目の専業経営が行われており、農家形態の経営が多く、伝統的な重量野菜産地として高品質な生産品を関西に送り出すある意味戦後以降の典型的な農家農業が多く残る地域です。

私はここで、2ヘクタールの農場で施設栽培による花壇苗栽培を行う会社を経営しています。またマッシュルームなどの全国シェア1位の生産者の方もいるなど、農家、農業法人と言う日本農業の生産主体の両方を見る事が出来る地域です。言い換えれば、「**農業経営を体験する事が、そのまま農家自身との交流にもつながる。かつ様々な作目を体験できる環境。日本農業の縮図と農村・農業の人の面の結びつきを学生に体感してもらう適地。**」

という3枚目のスライドにある言い方が最も適しているでしょうか。

最初の年、2008年の9月には京都大学の学生たちを中心とした体験者たちが、この瀬戸内市で現場の農業に「ガチ」で従事してくれました。また地元のお寺、千手山遍明院様が地域のためという事で境内の宿泊施設を無償で解放してくれたこと、地元農業経営者クラブの金銭的な支援、農業委員会の当時の会長の強力な後押しもあり、学生たちに旅費以外の負担なく会を実行する事が出来ました。この体制はその後も継続していきます。正直、学生たちの反応が怖いところもあったのですが、「理屈ではない経験と、生産者との絆が出来た」という事が評判になり、学内を超えて噂が拡散していきます。5回目の取り組みには、近大、日大、岡山大、京大などから大学を超えて40名以上の学生たちが「ガチ」の学びを求めてやってくるようになってきます。

また、農業体験と同時開催したシンポジウムも順調に大きくなっていきました。初年度農業体験参加者**20名**、シンポジウム参加者**40名**から5回目には、農業体験**40名**、シンポジウム参加者**200名**までに事業拡大まで事業拡大をしていく中で、大きな転換点となったのが、2011年からJA岡山青壮年部東支部から正式な支援を頂けることになり、盟友との個人的な取り組みであったものが、青壮年部との正式共催と言う形に進化できたという事です。

実はこの前年から農機メーカーヤンマーさんのCSR事業による支援を受けられるように

なっており、人員の派遣や、学生を送り迎えする車のレンタル、学生への差し入れなどを大きく負担してもらえるようになり、開放して頂いているお寺がかなり広いという事もあり、学生の滞在可能人数が増え希望者に対して受け入れ農業者の人数の慢性的な不足に悩まされることになりました。この状況に対して青壮年部が支援を申し出てくれ、JAの正式な呼びかけの下、瀬戸内市の近隣西大寺地区の農業者、また隣接する赤磐市の農業者が受け入れ農家として多く手をあげてくれたのです。

これによってより多くの学生を受け入れることが出来、青壮年部の判断を介して学生と農業者、また地域同士のきずなが深まった契機となったのです。

5年目からは、民間のデザイン会社である、トータルデザインセンター様のデザイン無償提供のCSR事業「デザインバンク」からのポスター原稿提供、瀬戸内市の正式支援。青壮年部との共催体制により、会が完成する事になったのです。

（事業がもたらした成果）

スライドの5枚目にあるように、この取り組みは短期的、長期的に多くの成果をもたらしてくれました。まず、京都大学大学院生の一人はこれを機に就農することになり、現在瀬戸内市にて農業者として活躍しています。加えて農業者と学生との交流増進が達成され、一つの象徴的な事例として、農業体験に来た院生の一人がテーマに瀬戸内市の農業を選んだことで、京都大修士論文報告会への盟友生産者出席がなりました。論文の報告会に生産者自身が来ることは、京都大学農業経済学の専攻の歴史で初めて位の事だったようで、また、盟友が積極的にそこの場で意見を述べたりしたことで、教授たちに感動を持って迎えられるようになりました。このように学生の論文へ取り上げられることによって普段は漠然と考えているだけの客観的な地域把握の手段を得るという側面も注目すべきだと思います。

長期的な効果としては、まずは参加大学生の広域化です。いろいろな大学生が集まることはそれだけの個性や地域に農業の生の感覚が発信されるという事ですから、これは何よりも重要な事ともいえます。それに勝るとも劣らない成果としてあげられるのは、この取り組みに参画したことをきっかけとして、瀬戸内市、ヤンマーさんの間に地域づくりに関する包括協定が結ばれたことです。これは瀬戸内市の色々な農業振興の取り組みをヤンマーさんが支援するという約束で、実際にこの協定に基づいて盟友が遊休農地の復活をする際にはヤンマーさんが農機でその作業を無償補助したりと言う状況が出てきています。また、農業体験意参加して「農業を何とかしたい」という学生有志が、自分たちも農業を支える当事者でいたいという想いの下学生農業法人を結成して、瀬戸内市で自分たちの農場を借り、生産から、販売、イベントなどを手掛けるようになっていきます。縁の促進から、企業の取り込み、学生ベンチャーの取り込みがこの取り組みをきっかけになったのです。産・官・学の連携が今の農業で一番重要だと言われてきています。まさにその専行的な縮図を取り組みが導いている・・・農業の変革に寄与したそういえる結果と思っています。

6枚目からはこの活動がメディアに取りあげて頂いたものを載せています。本当に多くの方が注目してくれた証拠だと思います。8枚目は提供を受けた5回目のシンポジウムポスターです。垢抜けたデザインでこの仕掛けを生産現場から仕掛けたことに、都市と遜色ないセンスを現場から示すという前例になっていると思います。

9枚目は、シンポジウムの概要をまとめています。若干いや相当読みにくいですね・・・でもそれくらい盛りだくさんだったこと、この見にくいスライドから読み取ってもらえたら嬉しいです。大学の先生から、企業人、地域プランナー、全青協元会長など本当に色々な方と多くの聴衆が参加してくれました。

10枚目のスライドは成果を表にまとめています。今回の一番の収穫は、盟友と個人的に始めた地域にある自発性を組織として青壮年部組織が後見することで、会の公共レベルの引き上げに成功し、盟友と学生の出会いの場を青壮年部がコーディネートするという形が作り上げられたことだと思っています。これは、絆を見守る青壮年部という全国発信できる事例と言えるのではないかと私はそう考えています。

(今後の展開として)

瀬戸内市での取り組みは、延べ200人上の参加と言う状況を迎え、地域自主開催できるレベルをこえた事で一応の役割を終えたと考えています。一番よくないのは、目的と方法が逆転してしまう事で、「会のための会」となる前に取り組を前向きに終了する事にしました。実際、その後学生たちの活動や生産者との交流が学生農業法人を介して定着していることも大きな転換点となりました。この根付きに任せていくことが一番重要だと考えています。

ここで新たな目標として考えて企画したのが、ここまでご紹介した青壮年部を巻き込んでいった盟友との取り組みを県内各地に伝播するという計画です。学生+農業者→それを支援する青壮年部の絆。そんな素敵な取り組みで培った方法を広めていく第1弾として、今年9月1日から久米郡の盟友と連携し農業体験を行う計画を立て実行いたしました。地元の盟友、また県議、久米南町、美咲町の行政関係者の方がそれこそ「自分たちの事」として全面的に協力してくれたおかげで、早速30名の学生の参加と、メディアへの掲載、その後の交流増進などが起こっているようです。12ページに参考として記事を載せています。

以上が今回報告させて頂く取り組みの全体像です。

盟友個人がつかない手が、学生を介して盟友同士の手を取り合わせて、組織が後ろで微笑み見守る。繋いだ手の先に「絆」はあるはずですよ。だからまずその手を取る、そこからはじめてみませんか。

以上、ご清聴ありがとうございました。

